

常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年9月3日(金)

◇ 顔を合わせて

若干声色を細くした蝉の鳴き声を背に受け、校内の各所で一人前になりたての赤蜻蛉とんぼが軽快に舞う。相変わらず暑さは続くが、常磐で命を紡ぐ生き物の姿から、秋が近づいてきていることを実感できる。

さて、新型コロナウイルス変異株（デルタ株）の感染拡大は、比較的安全とされてきた子供たちにまで影響を落とし始めている。実際のところ、岡崎市の感染者数に目を向けてみると、「10歳未満学生」「10歳代学生」の感染者数が日を追うごとにその割合を増してきていることが確認できる。まさに、子供たちの間近にまで危険が迫ってきている現状にある。

こうした状況を鑑み、岡崎市教育委員会からは子供たちの安全確保のための様々な通知が届く。加えて8月の最終週だけでも2回にわたる臨時の校長会議。事の重大さ、危機的な状況であることをしっかりと受け止め、真摯に向き合うことを腹に据えながら2学期が始まった。

体育館で行った始業式では、児童間の間隔を2m。これまでの倍である。それでもすっぱりと収まるから、本校の環境は大変有難い。

すっかり離れてしまった友達との距離。はたして子供たちは、これをどう受け止めただろう。

全校児童が一堂に会して行われる始業式。そして学級全員が集う教室での授業。あたりまえのようではあるが、市内の多くの小中学校では、これとは全く異なる形で2学期をスタートさせている。



多くの学校は半分の児童・生徒が登校。これを隔日に繰り返す形で行っている。よって、始業式は1日、2日と2回行った学校が多いと聞く。しかも全校放送で。校長は子どもではなく、テレビカメラのレンズに語り掛け、子供たちはテレビに映る校長の話聞く。何ともさみしい。

対して、自分は子どもたちを前にし、顔を合わせ、視線を合わせて話ができた。始業式後に早速始まった授業も然り。自分が受けもつ子供たちと顔を合わせ、視線を合わせて互いの表情を受け止め、会話のキャッチボールを交えながらのいつものおりの授業。

いつもどおりと書いたが、多くの学校では全く異なる。

教室には半分の児童・生徒。半分は空席である。教卓には教師のタブレットが据えられ、タブレットのピンカメラが黒板を捉える。撮影され、送信された映像を受け取るのは、自宅でリモート学習（リモート授業）を受ける残り半分の児童・生徒たち。

会話のキャッチボールが難しいリモート学習では、児童・生徒が学びの意欲を持続させるのは難しだろう。

教師らも折れそうになる気持ちを踏みとどまらせながら頑張っているのだろう。

そういう意味では、本校は本当に幸せである。

児童と教師が互いに顔を合わせ、視線を合わせ、会話を交わしながら教育活動が進められる現状の体制を維持できるよう、より一層の注意を払い、安全対策を講じていくと心に誓うのであった。

とはいうものの、学校では、有事の事態に備えるべく、リモート学習の体制を整えつつある。有事の事態とは、保健所の指示等により児童が自宅待機に迫られる場合などである。

学校では、すでに教員が児童の立場になってリモート学習運用のための研修を行うなど、粛々と準備を進めている最中である。

今後は、リモート学習運用に向けた各種書類の提出や家庭でのWi-FiとMyタブレットの接続、テスト運用など、各家庭にお願いする事案が多くなる。実施運用の意図をご理解いただき、ご協力をお願いしたい。

（各種問い合わせ先：常磐東小学校 教頭 伊奈良晃 電話46-2108）